

小川未明文学館 館報

第五号

小川未明文学館

vol.5



小川未明文学館

新潟県上越市本城町八一三〇（高田図書館内）

TEL 025-523-1083

FAX 025-523-1086



わたしの未明作品

文学館の「語らいのサロン」には、メッセージカードと色鉛筆をご用意しています。たくさん子どもたちが未明童話の感想、「童話体験の広場」で遊んで楽しかったこと、未明へのメッセージなどを、自由な感性で描いてくれています。

このカードは、「出会いのロビー」にある大きな原稿用紙形のボードに掲示され、文学館を訪れた人を出迎えてくれます。



小川未明文学館 館報 第五号

二〇一一年五月三十一日発行（年刊）

目次

【寄稿】

有澤俊太郎「小川未明文学館の創設と運営

—滑川道夫先生に学んだこと—

2

【報告】

文学館一年の記録（平成二十二年度）

4

平成二十二年度特別展（報告）

「雪国が生んだ童話作家

小川未明と杉みき子」

6

文学館講座「小川未明と杉みき子」

9

【小川未明文学賞】

13

【ボランティアネットワークだより】

「のぼらvol.7」

14

【文学館からのお知らせ】

16

小川未明文学館の創設と運営―滑川道夫先生に学んだこと

有澤 俊太郎

(上越教育大学教授)



小川未明文学館は平成十七年十月一日に開館した。あれから五年以上の月日が流れているが、その日を迎えるまでには五年に近い産みの苦しみの時期があった。

平成十三年五月に「小川未明文学館（仮称）整備構想検討委員会」という長い名称の委員会で審議が始まり、翌年の一月に大町の旧師団長官舎を候補とした提言書を木浦市長に提出した。提言書の骨子は、①未明文学の人間愛、誠実さの顕彰、②それを通した人づくり、であった。ところがしばらくして「高級軍人の官舎（軍事施設）に平和を訴え続けた小川未明では思想的に誤りではないか」という批判が三月議会から出て、構想は根本から再検討を迫られることになった。

その後、市は高田図書館内に文学館を併設することを決め、平成十六年の春に再審議を始めるよう要請があった。私は「いったん挫折したので、人を代えた方がいいのでは」と言ってみたが、聞き入れられず覚悟を決めた。

滑川道夫先生に学んだことを思い出したのはそのようなときであった。

滑川先生は昭和四十一年十一月から四十五年三月まで東京教育大学に在職され、私の学生院生時代と重なっている。その後もいつも近くにおられたような気がする。小柄で紺のベレー帽の滑川先生はいつもにこにこしながら、ゆっくりと話をしてくださった。ときどき秋田の言葉が混じっていた。かの地で生活綴方教師だった先生は「風土」ということを大切にされ、私を上越に近い富山の出身だと知ると、小川未明のことを調べてみるように熱心にすすめられた。若いときは、自分の生まれ育った風土の陶冶性を意識することはあまりない。そんなものは若いエネルギーで自我の働きかけでどうにでも変わりうるものだと思っている。しかし長ずるにつれて、自分の生まれ育った、北陸の蒸し暑い夏、強い風と深い雪の冬の気候が、自分を作るためにいかに隠然たる力を振るっているか、そしてそこから立ち上がる自我の勁さを自覚するようになるのである。

もうひとつ先生は、「文学体験」の大切さを教えてくださった。それは文学活動がもたらす、受け手一人ひとりの体験である。未明文学の「人間愛、誠実さ」は、朗読や劇や音楽や舞踊や絵手紙などに活動化されると、「澄んだ正義感」「ぎこちないが暖かな思いやり」「二途な理想」という具体的な私たちになつて私どものところに落ちてゆく。いつか「島の暮れ方の話」を読み上げた外国の人が、要所で“Which way (道、方向、方法、やり方、手段…) to go?”という「問い」を繰り返し織り込むのを聞き、この作品の新しい魅力を発見したように思ったものだった。未明文学には、このような活動を受け入れ、それによっていつそう輝きを増す魅力がある。私は前委員会でまとめた理念①②があまりに抽象的だったことを反省していたので、このように②を具体的な切り口にすれば、①を含んで、力強いメッセージを発信できると考えたのである。

幸いこのような考え方は新しい委員会（小川未明文学館整備検討委員会）の賛同を得ることができた。第二回の委員会は、



文学館常設展示場

平成十六年五月十九日、一茶ゆかりの里、北斎館、一茶記念館を視察した後、黒姫童話館に到着、その会議室で開催されたが、冒頭、小川未明関係委員の小川清隆氏から、

私を作った未明童話文学館（春日山神社内）は、大人が対象であり子どもに配慮して展示してありません。そのため、小中学生の団体で来られると少々困ってしまう面もあります。新しい文学館は、子ども対象であってほしいと思います。

未明童話は難しいとされていますが、未明はやはり子どもたちのために書いたのですから、未明文学館は子どもを軸とした展示室としたらどうでしょう。（会議録より）

という発言があった。すると、この発言に賛同し、発展させる意見が続き、私は確かな手応えを得て帰越したのであった。

木浦市長には、六月に「未明文学とのふれあい・体験を通して次世代を担う子供たちの心を育む」ことを基本理念とする整備計画案を報告した。市長からは「未明文学の世界は上越の自然や風土が根本にある。それが訪れる人に伝わる施設にしてほしい」という要望があった。ここで私はまた滑川先生のことを思い出すことになった。

市長に計画案を報告した後、新聞記者から「文学館という館名について違和感がないか。先生のご専門は。」と質問されたので、「私は国語教育が専門で、教育の出身です。」と答えると、すべて納得したような様子で離れて行かれた。私としては、文学館創設を推進する力として「風土に根ざした文学体験」という理念は重要な役割を果たしたと思っている。しかし、あの質問は開館後の「小川未明文学館運営委員会」でも様々なかたちで議論された。その要点は次の三点である。

- (1) 未明童話文学館との相互連携…未明ゆかりの春日山神社には独特の雰囲気があり、童話文学館には未明の遺品も多い。それぞれの役割の確認。両館の連携。
- (2) 高田図書館との相互連携…図書館内に併設した文学館であるという利点を大切にし、未明研究の推進に対応できるようにする。
- (3) 小川未明文学館市民ギャラリーの活用…このスペースのさらなる有効活用。文学研究の視点から。文学体験の視点から。この十年間、私は三委員会の委員の方々、市の関係者の方々、また未明関係の様々な方々にお世話になった。心から御礼を申し上げ、この施設の発展を祈るものである。

滑川道夫（明治三十九年～平成四年）

滑川道夫『桃太郎像の変容』（東京書籍、昭和五十六年、毎日出版文化賞）、『滑川道夫教育随想選―教わること学ぶこと』（教育出版センター、昭和五十七年）、『未明童話における南と北の思想』、『未明ふる里の百年』（小川未明生誕百年記念事業実行委員会、昭和五十八年）、高井有一『真実の学校』（新潮社、昭和五十五年）

文学館一年の記録

朗読研修会

五月二十九日・六月二十六日・七月十七日

参加者 各回三十名

橋由貴さん（ヴォイスアーティスト・朗読療法士）を講師に、朗読研修会を開催しました。研修会では、声と発声の基礎から魅力的なこぼの表現方法までを学びました。また、未明の童話「殿様の茶碗」を受講者が三組に分かれて朗読し、文学館おはなし会で発表しました。



朗読研修会発表会

特別展

雪国が生んだ童話作家

小川未明と杉みき子

九月二十五日～十月三十一日

来館者 四二二〇名

上越が生んだ二人の童話作家、小川未明と杉みき子。本展では、雪国の風土が生み育てたふたりの作家のかかわりを、自筆原稿、色紙、絵画等を通してご覧いただきました。（詳しくは特別展報告の頁をご覧ください）

会期中、記念講演会、ギャラリートーク、特別展おはなし会、手づくり絵本の講習会などのイベントを行いました。

記念講演会十作品朗読

九月二十五日

参加者 一二〇名

特別展会期初日のイベントとして、杉みき子さんを講師にお迎えし、記念講演会を開催しました。（詳しくは特別展報告の頁をご覧ください）

講演後、未明童話の会の高波昭子さんが未明の「とうげの茶屋」を、みきの会の小出文江さんが杉さんの「美しい町」を、みきの会の古木龍太郎さん（大手町小学校四年生）が杉さんの「空とぶカニ」を朗読してくださいました。



「空とぶカニ」朗読

ギャラリートーク

十月九日・十月二十四日

参加者 各回三十名

杉みき子さんのお話を聞きながら特別展会場を巡りました。参加者からの質問にその場でお答えいただくなど、和やかな雰囲気の中、展示物をご覧いただきました。



ギャラリートーク

特別展おはなし会

十月十日

参加者 三十六名

文学館おはなし会の特別版として、未明ボランティアネットワークの三つの会が合同でおはなし会を開催しました。

未明の「牛女」「二度と通らない旅人」、杉さんの「わらぐつのなかの神様」のお話を聞いたり、参加者皆さんで未明の詩を歌にした「雲の如く」を歌ったりして楽しく過ごしました。

文学館講座「小川未明と杉みき子」

十月三日・十七日・二十四日

参加者 各回三十名

特別展と同じ「小川未明と杉みき子」を総合テーマに、連続講座を開催しました。講師は、第一回宮川健郎さん、第二回藤本恵さん、第三回小笠裕二さんの三人で、それぞれ興味深いご講義をいただきました。「未明と杉さんの共通点、相違点といったことがよくわかった」、「二人の作品を読み直してみたいと思った」といった感想も聞かれました。（詳しくは文学館講座の記録の頁をご覧ください）

手づくり絵本のワークショップ

十月三十日

参加者 三十三名

手づくり絵本 木いちごの会にご協力いただき、杉さんの「空とぶカニ」を題材に、仕掛け絵本を作るワークショップを開催しました。はじめに「空とぶカニ」の朗読を聞き、参加者がイメージをふくらませた後、色紙やモールを使って、個性あふれるオリジナル絵本を作りました。皆さん時間を忘れて熱中していました。



手づくり絵本のワークショップ

童話創作講座

十一月三日・二十三日(入門コース)

十一月七日

(実践コース)

参加者 十三名

上越市在住の児童文学作家 杉みき子さんを講師に、入門コースと実践コースに分かれて短篇童話の書き方について学びました。毎年参加されている受講者も多く、それぞれに作風を確立され、創作を楽しんでおられます。受講者の皆さんの作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーや図書館で読むことができます。



童話創作講座

童話が開く心の扉

朗読と映画による

小川未明の世界

十二月八日・九日・十日

毎年、市内の小学六年生を対象に開催している朗読コンサートは十回目を迎え、橘 由貴さんの朗読と翠川敬基さんのチェロで未明童話「赤い蠟燭と人魚」、「月夜と眼鏡」の幻想的世界を味わっていただきました。後半は、アニメーション「野ばら」と未明のメッセージ(肉声)を紹介しました。今年は五十三校二〇四名の児童が参加しました。

第19回 小川未明文学賞贈呈式

十一月二十五日

「小川未明の文学精神を次の世代に継承し、子どもたちに心に夢と希望を育む」ことを目的に平成四年から募集している第19回小川未明文学賞の贈呈式を、東京都内で開催。大賞は滝井幸代さんの「レンタルロボット」、優秀賞は熊谷千世子さんの「海を越えてアミーゴ」、小林句子さんの「裸足でジャンプ」でした。文学賞の頁で、大賞の滝井幸代さんの「受賞の言葉」を紹介しています。

小川未明と絵てがみ展

二月二十六日～三月十三日

市内の小学校六年生を対象に開催している「童話が開く心の扉」朗読コンサートを鑑賞した児童から小川未明に宛て、絵手紙を描いてもらいました。大賞作品は、宮澤穂香さん(針小学校)の「月夜の少女」でした。



大賞作品



入賞の皆さん

平成二十二年 特別展

雪国が生んだ童話作家

小川未明と杉みき子

〈開期〉

九月二十五日(土)～十月三十一日(日)

上越が生んだ二人の童話作家、小川未明と杉みき子。本展では、雪国の風土が生み育てたふたりの作家のかかわりを、自筆原稿、色紙、絵画等を通してご覧いただきました。

展示内容と記念講演会の一部をご紹介します。



特別展展示内容

第一章 北の国のはなし

「未明作品との出会い」

杉みき子さんは、小学二年生のときに初めて未明童話と出会います。そのときは「小川未明」という名前も、作者についても知らないままでしたが、「赤い蠟燭と人魚」や「黒い人と赤い櫃」などの作品が持つミステリアスな要素に強く心をひかれ、それらの話は多感な文学少女だった杉さんの記憶に刻み込まれることになりました。杉さんと未明作品との出会いから杉文学の誕生までを紹介しました。

第二章 雪の町の物語

「冬のおとずれ」

冬という季節は、雪国高田に生まれたふたりの感性に深く影響を与えています。雪が降る前の静けさや海鳴り、雪原の風景はふたりの作品のなかに共通の体験として描かれていますが、この「冬」の捉えかたについては未明と杉さんには大きな違いがあります。

ふたりのそれぞれの作品に登場する「冬」について紹介し、生まれ育った高田で創作をつづける杉さんと、東京から故郷を思いやる未明、それぞれのふるさとへの思いをひも解きました。

第三章 日本海のうちた

「ふたりの海」

日本海は、未明の作品のなかで「北方の海」と名前を変え「赤い蠟燭と人魚」など数々の童話作品に描かれています。少年時代、春日山から日本海を眺め、海のかなたに美しい理想の世界を見た未明にとって、海は強いあこがれを象徴する場所でもありました。

一方で杉さんの作品においても、海は不思議な出会いやできごとが起こる、日常を離れた世界として描かれます。

ふたりにとっての海を、それぞれの作品から紹介しました。

第四章 春のあしおと

「雪どけ」

未明と杉さんの「冬」や「雪」に対する感じかたには違いが見られますが、冬から春に向かう時節の心情には相通じるものが認められます。ことに雪どけの季節、山肌にあらわれるしるしに人々が春の訪れを感じる「雪形」は、ふたりの作品のなかに故郷への愛着とともに描かれています。

春のあしおとが感じられるふたりの作品を紹介しました。

第五章 ろうそくの灯

「心のともしび」

ろうそくは、「赤い蠟燭と人魚」、「蠟燭と貝がら」など、未明の作品のなかで、心、切なる思いを表すものとして描かれています。

杉さんの作品「火をありがとう」においても、ろうそくの火は、少女の心ほんとうの優しさと勇気を与える道具として重要な位置を占めています。

村山陽さんが挿絵を描かれた『火をありがとう』の原画を展示しました。



演題「小川未明とわたし」

九月二十五日（土） 杉みき子氏

今日は、会場に展示してある、私が選んだ「わすれられない未明童話10選」、それを中心してお話をしていきたいと思います。長く書いておられますと、これどこかに書いてあったんじゃないかな、何かの本に書いてあったのを、私が読んでそれを無意識の中に閉じこめていて、今出しているんじゃないかな、と思うことが時々あります。特に子どもの頃から親しんできた未明の作品の場合、そういうことがかなりの確率で起こるような気がします。レジュメには、上のほうに未明作品、下のほうにはその作品と私の作品との関連や、私の思うことが書いてあります。

最初は「海ほおずき」です。私は子どもの頃、お祭りに行くといつも露店で海ほおずきを探していました。ところが不思議なことに、私はその海ほおずきというものがどんな形をしていて、どんな物なのか、どうやって遊ぶものか、全然知らなかったんです。ただ海ほおずきが欲しいという気持ちだけがずっとあったんですね。大人になってから読み返してみたら未明の全集にこの話があって、謎が解きました。あ、これだったんだと思って。もう読んだこともすっかり忘れていたんですけど、小学校二年生ぐらいに読

んだ「海ほおずき」という言葉が心にびりついて、どんな物であるのか知らないうちに、お祭りでも探してみたいという事なんです。私は未明童話の結びの場面に非常に惹かれることがありまして、無意識ですけれども真似をしていくという部分が多いように思います。この作品も、知らない男の人が売る黒いカンナの花が印象的でした。

次に「河水の話」です。最後の一文が良いんです。「しかし、彼らは、まだ希望を捨てませんでした」。それを讀んだ時私は、あんなさんの杖もバナナの皮も、これほど絶望的な状況にあるのに、希望をもつことができたんだなと。人間というのはどんなに辛い状況にあっても希望をもつことができるんだということを、強烈に心にすり込まれた気がしました。その頃からでしょうか、「希望」ということが自分のキーワードのようにになっているのを感じ続けています。



「角笛吹く子」。子どもの頃、未明作品が好きで愛読していたのですが、一つだけ問題がありました。それは、私は雪が大好きなのに、未明さんは雪が嫌いだとくり返して書いていくことです。私それが不思議でしかたなくて。なんでこの人は雪のすばらしさを知らないのかかと、それだけが大きな疑問でした。それからも、雪が好きだという作品が見当たらないのでがっかりしていました。やっと全集の中でこの作品を見つけたら、よかったなと思いました。未明さんもやっぱり、冬という季節のすばらしさをちゃんと知っていたんだなという気がしました。でも、かりに私だったら「黒い頭巾の魔物」ではなくて、「かくまきをかぶった雪女」にしたいと思いますね。黒じやなくて白いかくまきをすっぽりかぶった雪女が少年を先導していく、ということにしたいなと思いました。私の作品の中では、雪女をここから連想したという点から言いますと、「おばあちゃん、雪女に会う」という話があります。

次の「野ばら」ですが、これは内容というよりも、むしろこれを読んだ時の気持ちの移り変わりというのが私にとってとても大事な記憶になっています。初めてこれを読んだのは五年生の時で、戦争中でした。当時の私たち子どもは、戦争が悪いことだというのはまったく思案のほかだったんですね。ですからこの「野ばら」を読んでも、なにか外国の昔のおとぎ話を読むような気持ちでさらっと読んで、未明さんがこれを書いた気持ちというのには、全然想像することもできなかった。戦争が終わってからも一度この作品を読みました。そうしましたら、ああ、未明さんは戦争というのはあつてはならないということ言うために、こういう作品を書いてくれたんだと。しかもそういう気持ちを、あからさまに戦争は悪いと言うんじゃないで、こういう美しい作品の中に自分の言いたいことを入れていくことを教わりました。そして、どんなすばらしい物を与えられても、読む方にそういう素地がなければ、作品の本当の意味を知ることができないんだということをつくづく考えさせられました。私は短い話をたくさん集めて一冊の本にする事が多いんですが、『小さな雪の町の物語』とか『小さな町のスケッチ』、『小さな町の風景』などは、そのたくさんある短いお話の中に、一つ二つは平和に携わった話を必ず盛り込んでいます。これは自然にそうなるってしまうんですね。これも「野ばら」の体験がなせるわざかと思う。そういう大きな教えをここから学んだと思っています。

童話も入っていたんですけど、なにかこの未明童話集には違うものを感じるんですね。なんだか身近なんです。ことにこの作品の舞台は、直江津とか五智あたり

の海のような気がするなど。ろうそく屋のおじいさん、おばあさんも、あの辺の海岸の小さな小屋の中でろうそくを作っていたんじゃないかなと、そんな気がしました。この人の書くものに限って身近に感じられるというのはどういうわけだろうと不思議に思っていました。五年生の時に今度は大人の本で未明を読んで、年譜を見たら「新潟県高田出身、大手町小学校出身」と書いてあったので本当にびっくりしました。自分と同じ高田、そして自分と同じ大手町小学校を出た先輩なんだとわかって、だからこんなにも身近に感じたんだなということをつくづくそこで悟ったわけです。人魚が登場するということも未明さんから借りた私の作品に、「人魚のいない海」があります。これはちょうど公害問題が非常に言われ始めた頃に書いたものです。

「牛女」からはいろいろ拝借をしています。まず「雪形」ですが、雪形というのが私は昔からとても好きなんです。私は馬も好きなんですよね。私が書くものにはあまり動物が出てこないんですが、鳥と馬がよく出てきます。あのはね馬は春でない季節はどこにいるんだろうなどと考えて、それを題材にして書いたものの代表が「朝やけまつり」です。もう一つ、

「牛女」から意識して拝借して書いた作品に「夕やけりんご」があります。「牛女」の母と子どもを愛を、こちらでは友情に代えて表現しました。

「大きな蟹」は大人になってから読んだんですが、雪国の人が年老いて一冬過ぎると、めっきりと老け込んでしまう。そんなことをとても見事に、象徴的にとりあげているんじゃないかなと思いました。それを借りまして「空とぶカニ」という話を書きました。この話を収めた『小さな町のスケッチ』の連載は、画家の村山陽さんにあらかじめ何枚かの絵をお借りして、その絵にふさわしい話を私が書いていくという大変楽しい作業で、絵が先にあったんですね。ある時描いてくださった蟹の絵を見たときに「大きな蟹」の思い出しました。こんなユーモアのあふれる解釈もできるなという遊び心で書いた作品で、自分でも気に入っています。



「殿様の茶わん」。今、五年生の教科書に載っております。「わらぐつのなかの神様」というのが、おそらく私の作品の中では一番有名な、あるいは一番読者が多い作品ではないかと思いますが、その中に「使う人の身になって、使いやしく丈夫で長持ちするように作る」ということができてきます。私はその時自分で思っていることを書いたんですが、これが「殿様の茶わん」の殿様の言葉から出ているんだということも、あとで悟ったんですね。だいぶ悩んだんですけど、言葉をまとめるつもりで盗作したわけじゃないし、ヒントをいただいたということも勘弁してくださいと、春日山に向かって頭を下げました。子どもの頃に読んで感銘を受けた本というのは、自分では全然記憶がないつもりでいても心のどこかに残っていて、いつか一生のうちに出てくるんじゃないかなという気がしています。

最後「山の上の木と雲の話」、私が一番好きな未明童話です。私はこれを読んだ時に、この山は金谷山だと思い込みました。それから私は金谷山に登るたびに山の上からずっと高田のむこうの直江津の方を見おろしますと、直江津の海のはるかかなたに雲があつて、その雲の下に美しい町が見えるという気がするんです。それは今に至るまでそうなんです。そして、このひとりぼっちの木が、いつまでも美しいものにあこがれる気持ち、その気持ちの強烈さというのが非常に強く

心に残りまして、これも私のキーワードの一つになったんだと思います。子どもの頃に未明さんからもらった「あこがれ」の気持ち、そしてさつき申しました「希望」というキーワード、それが大人に至るまで私の中にずっとあつて、書くことの原動力になっているという気がします。今ちょうど私は、未明先生が亡くなった七十九歳です。これからも大先輩にいろんなものをいただきながら、できることならずっと書き続けていきたいなと思っています。



「とうげの茶屋」朗読



「美しい町」朗読

平成二十二年度の文学館講座は、「小川未明と杉みき子」をテーマに、宮川健郎氏、藤本恵氏、小笠裕二氏を講師に開催しました。ここでは、講座内容の一部をご紹介します。

第二回

杉みき子と未明

「未明的なもの」と

「未明でないもの」

十月三日(日) 宮川健郎氏
(武蔵野大学教授)



杉みき子さんの小川未明の捉え方は、際立って独自なところがあるのではないかと思います。1950年代に起こった「童話伝統批判」では、未明の童話は「ネガティブ」などの批判を受けました。し

かし杉さんは、「河水の話」からは希望を、「山の上の木と雲の話」からは憧れということを読み取っている。むしろ、未明は希望を語っていないし、憧れを語っていないという、ちょっと乱暴な言い方をしますが、そういう評価にずっと傾いてきたのが未明評価だったと思うんですけど、その中でやはり希望や憧れを読み取ることができるとするのが、杉さんの未明の捉え方だと思っんですね。そこにはやはり杉さん自身の理想主義とか向日性が表れている、そういう読み方だというふうにも言えるんじゃないかと思っます。現代の児童文学は未明たちを否定する中から生まれてくる訳ですけども、理想主義や向日性は児童文学の時代の出発期の60年代から70年代にキーワードとして語られたことなんです。理想主義というのは子どもとつてのあるべき理想を児童文学が語らなければいけないという考え方。向日性というのは明るい太陽の光を目指していくような、そういう性格を児童文学は持たなくちゃいけないという考え方。その考え方に近いものを、杉さんの未明の読み方に見ることができるようになります。

いなかだと考えると、未明の言葉は詩的で象徴的ですから、あまり地名など具体的な書かない。北国、雪国というふうに言っって、あるいは山と言っって象徴的な世界を作る。具体的なことではなくて象徴的な世界を作っって書いていくのが、未明の童話なんだと思うんですね。ところがやっぱり杉さんは、高田と考える、金谷山と考える。未明の書き方が非常に象徴的であるのに対して、杉さんはかなり具体的なところで書かれるのではないかと、その自然の捉え方・表現の仕方というの、やっぱり違うのではないかと思っます。未明は東京の人になってしまっますが、杉さんにとつてはこの高田という場所がずっと住み続けている日常であるわけですから、非常にリアルな捉え方になる。そういう違いもあるのかもしれない。

「わらぐつのなかの神さま」は教科書に載っっていて、全国の子ども達に読まれている作品ですが、未明との関わりを杉さん本人が言っっています。この作品の大工さんの言葉は、未明の「殿様の茶碗」の殿様の言葉がもとになっているのではないかと、杉さん自身が気付かれてびっくりしたという話です。非常におもしろい話で、読書を通して子ども頃にもらいこんだものがやがて作品に表れるという、非常に典型的なよく分かる例で、未明の「殿様の茶碗」の言葉が杉さんの中で本当に自分のものになっって「わらぐつのなかの神さま」という作品に表れた。読んだことが形を変えて見事に表れた面白い、興味深い例だというふうに考えました。また、この作品は強く構成意識の働いている書き方だと思っます。最後に、一種のオチをつけるわけです。オチをつけるというのは、きちんと構成する意識が際立っっているからこのような書き方になると思うんですけども。小川未明の構成意識ということをお考えと、これはむしろ逆だと思っます。未明の童話の場合はオチを付けるという考えはない場合が多いんじゃないか。杉さんの方が「プロット」の意識が大変強いというふうに思っます。「ストーリー」というのは事件を事柄の順序で語っただけ。その深層でどういうことが起っっているのか、どういう因果関係が働いているのかということ語った時にプロットになる。その深層を組み上げるような形で、プロットの意識で書いていくのが杉みき子で、小川未明の方はプロットの意識はわりと乏しい。そこが二人のものすごく違うところじゃないかというふうな気がしっます。杉さんのこの意識は、ミステリーや落語が好きだということから来ているんじゃないでしょうか。「かくまきの歌」や「電柱ものがたり」にはちょっと男っぽい落語の語り口を感じしっます。

景を書くようなものが近代童話です。それに対して、もっと散文的な言葉、あるいはもっと説明的な言葉で子どもという存在の周りにある状況を、子どもとの関係の中で書いていくのが現代児童文学です。杉みき子の児童文学というのも、大きく言うとその散文的な言葉を獲得した現代児童文学の作家の一人、というふう

に思うんですね。北国とか雪国とか山、というふうには象徴的に書いていくんじゃないかと、やっぱり金谷山というふうには書く。そういう書き方はやはり現代児童文学の書き方ではないかと。またプロットの意識がかなりきちっとしているというのも現代児童文学の書き方のような気がします。杉さんは短編の名手で、長編中心の現代児童文学の中では独特な位置を持っている。それは現代児童文学の中では独特で、もしかするとある種の童話に近い面があるんじゃないか。童話の時代というのは、詩的で象徴的な言葉で書き出すから、短編しかないんです。散文的な言葉に変わった現代児童文学は、長い作品も書き得ますが、その中で杉さんは短編を書く。それはどこかで感覚的な表現、詩的な表現も含んでいる形になっているのかもしれないと思います。

の一人、ということになるんじゃないかと思います。そう考えていきますと高田という風土が生んだ未明は、近代童話の代表的な作者であり、杉みき子は現代児童文学の作者の一人である。高田という町には日本の子どもの文学が全部ある、小川未明と杉みき子で全部ある、というふうにも言えると思います。高田に来るとい

第二回

「定住者」杉みき子の描く

人と風景

十月十七日(日) 藤本恵氏
(都留文科大学准教授)



今日の講座のタイトルを決めるきっかけになったのは、杉さんのエッセイ「定住者の夢」です。このエッセイの冒頭で作家・五木寛之による人間の分類―「航海者」と「漂流者」―が紹介されています。それは、人間には、「航海者」つまり人生の目的を一つに定めて着実に進んで行くタイプと、「漂流者」つまり目標とか行く手を定めないで自由に生きていくタイプがある、というものです。おもしろいのは、杉さんが、このどちらかに自分を当てはめるのではなく、どちらでもない「定住者」だとしていることです。そのあとに、自分は未明の童話「山の上の木と雲の話」に出てくる「木」のよう

な存在だとも書いておられます。杉みき子という人間は、「木」のような「定住者」なんだという自意識がわかりやすく示されていて、印象に残りました。「木」のような「定住者」が、私の心にすっと入ってきて留まったのは、作品を読んで抱いていた杉さんのイメージとぴったり合ったからなのでしょう。そのイメージは、「山の上の木と雲の話」を書いた未明と比べると、よりはっきり見えてきます。未明は定住者ではありませんでした。故郷への思いを残しつつ、東京へ出て暮らした人です。杉さん自身は謙遜して、定住しつづける自分は怠け者にすぎないと

言っておられますが、杉さんの定住には、「定住者でいたい」という強い意志が伴っていると思うのです。

そして、私が心魅かれる杉作品には、強い意志を持った人物がたくさん出てき

ます。なかでも一番好きなのは、「風と少女」という短編です。強風に逆らって歩かなければならない少女と、同じく強風のなかを飛ぶ海鳥の姿がリンクして、少女は、こうやって進むこと、それこそが生きていることなんだと気づきます。

人と鳥の共鳴といましようか、命の交感のなかで生まれた少女の気づきが、み

ずみずしく伝わってきます。ここには、強く生きようとする少女の意志が表れています

ですが、このように凛々しい少女は、他の作品にも出てきます。

そこで、次に紹介したいのは「地平線までのうずまき」です。この短編には、うずまきに関わる四つのエピソードが含まれています。最初の三つのエピソード

では、主人公の少女の望みが絶たれ、それを「うずまきが切れた」と表現しています。最後のエピソードでは、少女の先生が、人間の歴史を蚊取り線香のうずま

きに例えます。それを聞いた彼女は、人間の一生もうずまきのようなものかもしれない。私たちは同じ失敗や悲しみや辛

さを繰り返しているように見えながら、実は前進しているんだ。そうじゃないと、真に生きているとは言えないのだと考

えます。さらに少女は、これからもうずまき、つまり自分の希望は途切れることがあるだろう。けれども、それを接ぎ合わせ

せて、地平線までの大きなうずまきを書くことと決意します。

この作品全体を見わたすと、「うずまき」がキーワードになっていることは明らかです。「うずまき」は、最初のエピソード

第三回

「小ぶる雪の町の物語」

その他を読む

十月二十四日(日) 小笠裕三氏

(上越教育大学教授)



・ 杉みき子さんの印象

杉みき子さんは、気どらない人柄で、心のあたたかい方です。日頃、お話をうかがっていると、杉みき子さんの、優しい、かわいらしい(！)お顔のうちに、どういふ作家の顔があるのだろうと不思議に思ったりするほどです。杉みき子さんという作家の持つ、物事をつかみとる力の背景には、子どもの、とりわけ少女の持つ直感力、そういうものがあるように思われます。

・ 小川未明さんと杉みき子さんの詩的な要素

小川未明さんと杉みき子さんは、二人とも詩的な要素を持つ作家ですが、どういふ違いがあるのでしょうか。違いの一

なものを見ます。竹やぶのなかに自分の家があるかもしれない、あつてほしいという願いが、花に囲まれた小さな家を少女に見出させたのです。でも、そのあと何度行ってみても見つけられない。少女は、一度だけ見た家は結局私の家ではない、現実の自分の家の方が良いと考えます。それでも、幻の家のイメージは消えていかず、時々、夢に出てきたりする。

この少女は自分の願いで幻の家を見出すけれども、やっぱり現実の家が良いと考えて、ちゃんと帰ってきています。この安心感。行きつばなしにならないで、ちゃんと帰って来られる少女が主人公であるという安心感は、児童文学に必要な要素なのかもしれません。とはいえ、幻も消えず、夢で戻ったりするところもポイントです。少女は頭の中で行き来を続けるんです。このあたりの、幻(非現実)と現実の抜群のバランスに特徴を感じます。杉作品の風景には、人の意志で不思議なものが見れます。これは、杉さんの手にかかると、風景が色あるいは一つの層ではなくて、いくつかの層に分かれて見えるということでもあります。一つの層に別のものが入りこんで、多層的で魅力的な世界をつくっているのです。

最後に、もう一度、最初にご紹介したエッセイ「定住者の夢」に戻りましょう。このエッセイのおわりに、「この木が夢に描く夕やけ雲は、おそらく現実の雲より何倍も美しく輝いているのに違いない。私の住むこのまちもまた、私の目には、現実のまちよりずっと美しく見えている

ソードには具体的な物として出てきます。そして、二つめ三つめのエピソードでは、少女の希望を表す象徴に変わります。四つめのエピソードでは、再び具体的な物(蚊取り線香)として現れ、最後に、少女の考えが加わって、新しい象徴としてとらえ直される。最初、(うずまき)は、自分の希望が断たれるという、暗いあるいは辛いイメージです。ところが最後に至って、少女が、(うずまき)は切れてもいい、接ぎ合わせてその上を進んでいけばいいと考えることで、プラスイメージに変わります。この作品の核となる(うずまき)のイメージは、少女の成長とともに暗から明に、あるいはマイナスからプラスに鮮やかに転回しているわけですから、こうしてみると、「地平線までのうずまき」はエッセイのように、淡々とできごとを綴っているようにみえながら、その実みごとな構成を持ち、物語としてのダイナミズムもあることがわかります。

強調しておきたいのは、どのエピソードでも、主人公の少女が広い世界を求め、それを知りたい、見たい、やってみたいという気持ちを持っていることです。少女に強い意志があるからこそ、広い世界に向かつて(うずまき)をつないでいくことができるのでしょう。この少女もまた、「風と少女」の主人公と同じ、凛々しい少女だと思います。

では、こういう少女が身近な風景を眺めると、何が起きるのか。それを、短編「やぶ入り」で少しだけ見てみましょう。主人公の少女が、お寺の竹やぶで不思議

つは、言葉の使い方です。未明はゴッポツした文章を書きます。私達は、正確な日本語で書かれた文章を価値ある文章と捉えませんが、文学の場合はそうではありません。正しい文章でなくても、そこに味があり、価値のある場合があります。未明さんの文章は、教科書ふうの文章ではありませんが、そこに彼の味があつて、その味こそ価値だと捉えた方がよいでしょう。それから、未明さんの詩的な要素の中には、〈熱さ〉があります。その〈熱さ〉は、大人の身勝手さや冷たさに対する怒りの表現として表れたり、子どもを守りたいという激しい思いとして表れます。

杉みき子さんのほうは、文章を読んでみると、杉みき子さん自身の声が聞こえてくるような、話し言葉と書き言葉がうまくリンクした所があるように思います。正統派の端正な日本語が、生きた言葉として、はつきりと読み手に伝わってきます。また、未明さんの〈熱さ〉との対比でいえば、杉みき子さんの場合は、〈あたたかさ〉があるというべきでしょう。あたたかいもの、あるいは向目的なものが、杉みき子さんの詩的な要素を構成しています。

杉みき子さんは、子どもの時分、自分ひとり子だったけれど、友達がたくさんいて寂しくなかった、太平洋側の人たちは雪がなくてかわいそうだと思つたと書いておられます。ところが、同じひとりっ子の未明さんの方は、非常に孤独だ、雪の様子というのは寂寥に耐えな

つたと書くわけです。冬が持っている一種不可思議な正負両面にわたる力というのが、上越の雪国の文化の中にあつて、それが二人の文学を立ち上げさせているように思います。雪の世界には、本来的に幻想的神秘的な詩がセットされているのです。

・小川未明さんと杉みき子さんが描く上越の百年

小川未明さんは「童話を作つて五十年」というエッセイを書きましたが、未明さんが童話の筆を置くのが昭和三十年頃です。明治時代末から五十年間にわたつて童話を書いてこられたわけですから、杉みき子さんが児童文学者として活躍を始めるのは昭和二十年代の後半。ちょうど未明さんの童話の後を受ける形で、杉みき子さんの児童文学が始まります。杉みき子さんの文学活動も、五十年にわたります。

このことから、昭和三十年以前の五十年間と以後の五十年間、つまり百年間の上越の文化、自然、人のありようを、小川未明さんと杉みき子さんが二人で書きとめてくださったと考えるよいでしょう。曾祖父の代あたりから、上越の人々が、日々感じとつていたものや見てきた風景を、二人の作家が言葉に書きのこしてくださったわけですから、私の好きな杉みき子さんの作品に「カラスのいるゆうびん局」があります。この中に登場する杉の木は、自分が成長してきた時代ごとの町の風景を記憶しています。そのように目に見えるもの、目に見えないものの両面にわ

たつて、さまざまの事象を書きとめてくださった二人の作品は、上越の人々にとって、たいへん貴重な文化遺産だと思います。このことを、上越の人はずっと誇つてよいと思います。

・四人の作家の「M」

以前から私が関心を寄せてきた作家の宮沢賢治さんと三島由紀夫さんは、姓がいづれも「M」で始まります。小川未明さんと杉みき子さんも、名前が「M」で始まります。宮沢賢治さんと三島由紀夫さんに、似ているところと違うところがあるように、小川未明さんと杉みき子さんにも似ているところと違うところがあります。共通点は「童話」「雪国」「北国」「あこがれ」でしょうか。違いは「出郷／在郷」「熱さ／あたたかさ」「暗さ／明るさ」でしょうか。たえず変化しながら時代の問題と向き合った小川未明さんと普遍的なテーマを文学の核に据えた杉みき子さんの違いも特徴的です。

四人の作家の世界を比べてみますと、小川未明さんから三島由紀夫さんへという流れも考えられます。また、宮沢賢治さんから杉みき子さんへの流れも考えられます。杉みき子さんの文学には、言葉の使い方やイメージの使い方、宮沢賢治文学との親近性があるように思われます。東京で作家活動を送つた小川未明さんや三島由紀夫さんとは異なり、宮沢賢治さんは岩手県花巻で、杉みき子さんは新潟県高田で、ずっと文学活動をしてきました。こうした対比や類似から、もつと意味ある関連性を見いだすことができ

ると思います。

・『小さな雪の町の物語』

杉みき子さんの作品は、多くの教科書に載っています。全国の児童・生徒たちが熱心に読むわけです。杉みき子さんの創作集『小さな雪の町の物語』は、郷土文学でありながら、郷土文学を超えたところがあります。その背景にあるものを、私は次のように考えています。

上越の文化・自然の豊かさ。

ふだんの生活から大事なものを取り出す観察力。

あこがれの起点をもつこと（木のイメージ）。

あこがれの翼をもつこと（鳥のイメージ）。

雪国を喜びという視点で捉えかえす肯定的な力。

少女の記憶のかずかず。少女の直感的な認識力。

表現力。言葉の力。

構成員。

イメージ・シヨンの豊かさ。

読書体験。

他に、おそらく語られることのない創作上の秘密もあるでしょう。私が読んだ一つ一つの作品の解説は、配布したプリントにあるとおりです（省略）。あとはみなさんご自身で、『小さな雪の町の物語』に収められた作品を読んでみて下さい。私たちの郷土が、いかにして、杉みき子さんの手によって文学化されているかを、またそれがいかに普遍的なものに昇華されているかを考えてみて下さい。

小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、平成4年に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。平成22年度で19回目を迎え、これまでに延べ8800編を超える作品が国内外から寄せられました。大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。

第20回募集要項

◆募集作品

・小学3～6年生を读者対象とした創作児童文学で、内容・形式は自由。

・400字詰め原稿用紙で50枚～120枚

・未発表作品に限ります。

*詳細は左記にお問い合わせください。

◆応募資格

年齢、プロ・アマを問いません。

◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参してください。

◆締切

平成23年10月31日(月)(当日消印有効)

◆入選作

・大賞1作(ブロンズ像・賞金100万円・副賞)

・優秀賞2作(賞金20万円・副賞)

◆発表

大賞・優秀賞の受賞者は、平成24年3月上旬に本人に直接通知します。

◆贈呈式

平成24年3月(予定)(会場:上越市内)

応募・お問合せ先

〒943-8601 新潟県上越市木田1-1-3

上越市文化振興課

「小川未明文学賞係」

TEL 0255-526-6903

FAX 0255-526-6904

E-mail: mimei@city.joetsu.lg.jp

受賞のひとこと

私が生まれて初めて物語を書いたのは、小学校三年生の時です。「こりすのぼうけん」という、原稿用紙二十枚くらいの作品でした。子どもの頃から本が好き、物語を書きたい、という思いはあったのだと思います。

しかしながら、その後ずっと文学少女だったというわけではありません。本格的に創作を始めたのは、二十五歳の時でした。

募集要項で目にした、小川未明の文学精神である「人間愛と正義感」は、私がいままでに書きたいものでした。幼い頃、世界名作集で夢中になって読んだ「赤いろうそくと人魚」、出会いはもうそこから始まっていたのだと思います。

何かにとりつかれたように、二年間で原稿用紙百枚から三百枚ほどの物語を、五作品書き上げ、規定の枚数に見合うものを、小川未明文学賞に二年連続で応募しました。

しかし、結果は一次審査も通過せず……もっと構成を練らなければ、そう思った途端、まったく書けなくなってしまうのです。

結局、七年のブランクを経て、娘が一歳になったのを機に書いたのが、今回の受賞作「レンタルロボット」です。

「生まれてきてくれてありがとう」

物語に出てくるお母さんのセリフは、私がいつも娘に言っている言葉です。

「あなたを愛している」

ただそれだけを伝えたくて、この物語が生まれました。

努力だけではどうにもならないことが世の中にはたくさんありますが、創作の世界においては、必ず努力は実るものと信じています。これからも、この賞に応募される方々によって、「人間愛と正義感」が多くの子どもたちに届けられるのではないのでしょうか。

まだまだ拙い私の作品に、賞を与えていただいたことに感謝いたします。上越市の皆様、小川未明文学賞委員会をはじめ、文学賞関係者の皆様、ありがとうございました。



第19回 小川未明文学賞大賞受賞 滝井幸代

(大賞作品「レンタルロボット」)



小川未明文学賞贈呈式

平成22年度の活動

- ・小川未明文学館ビッグブックシアターおはなし会
(毎月第2・第4日曜日、午後2時～) 延べ参加者289名
- ・小・中学校や放課後児童クラブ、福祉施設等への出張おはなし会
31ヵ所、1546名

- ・特別展おはなし会 参加者36名
- ・会員の研修

出張おはなし会



未明童話の会

富岡小学校2年生

- ものぐさじじいと、でんしんばしらとみょうな男がおもしろかった。こえもおおきくてききやすかったです。3年になってきてください。(S. K)
- でんしんばしらとみょうな男がおもしろかった。とくに、でんしんばしらうごくところがおもしろかった。またきてください。(K. I)

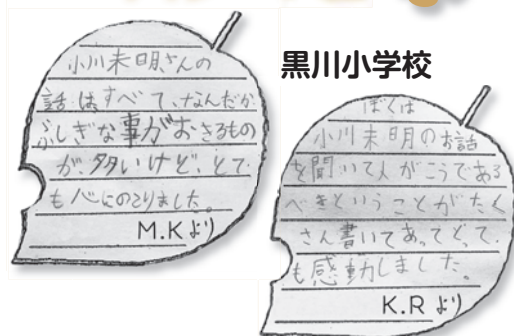
せせらぎの会

デイホームにて

紙芝居、大型絵本を持って行きました。未明原作「のぼら」の紙芝居は、戦時中を生きてこられた皆さんにはとてもよくわかり、真剣に見ておられました。また、「ももたろう」の歌にあわせて一緒に手遊びをしました。楽しかったと喜んでいただき、皆さんと握手してなごりおしくお別れしました。



グループ空



出張おはなし会や会員加入のお問合せ先

上越市文化振興課

〒943-8601 上越市木田1-1-3

Tel : 025-526-6903

Fax : 025-526-6904

E-mail : mimei@city.joetsu.lg.jp

のばら

未明ボランティアネットワークだより

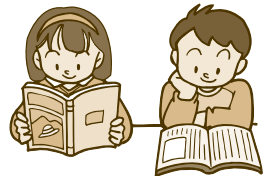
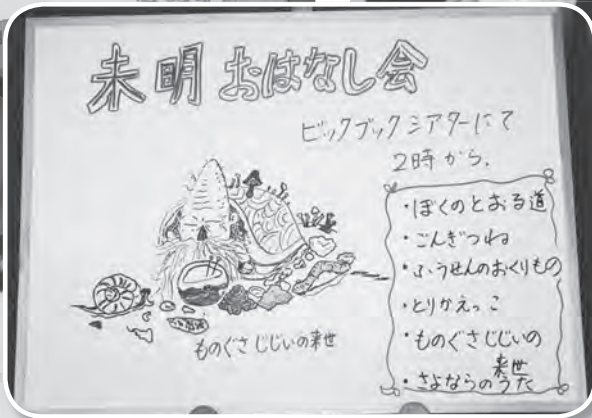
vol.7

発行：未明ボランティアネットワーク

発行日：2011年5月31日



文学館おはなし会



特別展おはなし会



● お知らせ ●

小川未明関係資料の収集について ご協力をお願い

小川未明文学館では、未明に関する文学資料の収集に努めています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いいたします。資料の寄贈については、特定の場合（すでに複数点を所蔵している資料等）を除きお受けしますので、ご不明の点はお問合せいただけると幸いです。

【主な収集資料】

1. 特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料（短冊・書軸等）、写真（オリジナル）、小川未明関係者資料（未明書簡、献本など）

2. 図書

未明作品集（未明生前・没後刊行図書）、全集・選集（未明作品を一部所収した資料も含む）、初出雑誌（未明作品掲載）、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3. 参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事（雑誌・新聞等）

平成23年度 小川未明文学館カレンダー

7月 朗読研修会 講師：橘 由貴さん
5日・12日・26日 いずれも火曜日

9月 朗読鑑賞会 15日（木）・16日（金）

10月 特別展「装幀挿画で楽しむ
小川未明の世界」(仮)

10月1日（土）～11月6日（日）

文学館講座 3回

小川未明文学賞締切 31日（月）

11月 童話創作講座

3月 小川未明文学賞贈呈式（上越）

*特別展の他に、随時小企画展を開催。

*毎月第2・4日曜日午後2時から未明ボランティアネットワークによるおはなし会を開催。

未明次女 岡上鈴江さんが、平成23年1月27日に逝去されました。
岡上さんは、自身も児童文学者、翻訳家として活躍するかたわら、様々な未明顕彰活動に尽力され、当館の活動にも多大なご支援をいただきました。

小川未明文学館のご利用案内

開館時間

火～金曜日 午前10時から午後7時

（6月から9月の間は午後8時まで）

土・日・休日 午前10時から午後6時

休館日

毎週月曜日（この日が休日の場合はその翌日）

休日の翌日・館内整理日・資料整理期間

年末年始（12/29～1/3）

入館料 無料



お問合せ

〒943-0835

新潟県上越市本城町8-30（高田図書館内）

TEL 025-523-1083

FAX 025-523-1086

URL <http://www.city.joetsu.niigata.jp/sisetu/ogawa-mimei/index.html>

発行 上越市文化振興課 〒943-8601 上越市木田1-1-3

TEL : 025-526-6903

FAX : 025-526-6904

E-mail : mimei@city.joetsu.lg.jp